

綴葉

ていよう

25 12

No. 443

あなたが創る生協の書評誌



話題の本棚

藤原辰史著『食権力の現代史 ナチス「飢餓計画」とその水脈』
パウル・ブッソン著、垂野創一郎訳『メルヒオール・ドロンの転生』

特集／海

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/



univ. 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

わたしたちを取り囲む、食べさせることの権力

食権力の現代史

ナチス「飢餓計画」とその水脈

藤原辰史著
人文書院



正義がひっくり返りかねない世界にあってもなお、飢えた者に食べものを分け与えることは正義である——アンパンマンの原点にこうした哲学があることはよく知られているが、その伝いけば、意図的に誰かを飢えさせることは絶対的な悪であるということになる。なるほど、食べることは普通の営みであり、食べさせることの愛と献身は揺るがない。しかしそれゆえにこそ、食べさせること／飢えさせることは、普遍的な権力として立ち現れるのである。

こうした力は「食権力」と呼ばれ、本書では《食料や食料生産に必須のものを一局に集中し、それらを根拠に人間や自然を統治したり、管理したりする諸力の束》と定義される。本書は食権力の振るわれた飢餓の歴史として、現代史の叙述を試みる。

◆ナチスとイスラエルを繋ぐ食権力の水脈

本書で取り上げられる話題は、第一次世界大戦時にドイツを襲った飢餓から第二次世界大戦におけるナチスの意図的な飢餓、そして現在もおこなっているイスラエルによって引き起こされたガザの飢餓までの流れを中心として多岐にわたる。とりわけ注目したいのは、飢餓の被害者が飢餓の加害者へと変じてしまう構造だろう。飢えるのは二度とごめんだ、というトラウマが、ナチスの食糧政策を

衝き動かし、食べさせる／飢えさせる人びとの選別を引き起こす。ナチスによる虐殺の背景にはそのような食権力が絡んでおり、イデオロギーだけでは決して説明できない。

けれども、食べることはあまりに普遍的なものであるために、かえって食権力の暴威は見過ぐされてきた。《もう少し踏み込んで言えば、ユダヤ人の強制収容所での虐殺の記憶を前面化することが、「…」飢餓というグローバルな虐殺の実態を覆い隠し、解決を遅らせることを助長しているように私には思える》。こうして無視された暴力は、イスラエルによるガザの飢餓まで続いている。

◆逃れることのできない食権力の「施設」

本書の議論を援用するならば、たとえば昨年から日本を騒がせてきた米不足と、それを受けての米の値上がりや備蓄米の放出は、まさしく食権力の場だったと云える。現代社会において、われわれの食卓は常に国家や企業による食の管理——あるいは管理しない——という権力に晒されており、食べなければ生きていけない以上、この権力の網目から逃れることは容易ではない。こうした社会は「施設」化していると著者は云う。もちろん「施設」で食が管理されることでもたらされる恩恵もある（学校給食など）。けれども「施設」化した社会で食権力が暴走した果てには、飢餓が待っている。

本書が主題としているのは、あくまでもドイツとイスラエルの現代史である。しかし、その深層に流れている食権力の水脈は、より複雑で巨大だ。この深み、出口の見えない「施設」の構造を捉え直すところから、われわれは考え始めなければならない。（水炊き）

（三三四頁 税込二九七〇円 9月刊）

オーストリア幻想文学の傑作——魔術的幻想咲き乱れる巡礼の旅

メルヒオール・ドロンテの転生

パウル・ブツソン著

垂野創一訳
国書刊行会



今生に先立つ肉体的存在を体験したわたしゼノン・フォラウフは、神の意思により、ふさわしい者の手に届くことを願いながらこれを書いている。わたしは特別な恩寵により人が死と呼ぶ変容を越え、前世の記憶を残している。

こう云って、語り手ゼノン・フォラウフは己が前世の記憶を綴る。それは一八世紀ドイツの貴族メルヒオール・ドロンテの生涯、神秘の力に導かれた秘教的な修業の遍歴だ。すべてのはじまりは幼年時代、不思議な回教僧の蟬人形にまつわる記憶である。エヴリと呼ばれていたその人形は、ある晩、寝台に入ろうとするドロンテを戸棚の方へ手招きする。ドロンテが人形の方へ歩み寄った次の瞬間、天井が寝台の上に崩落した。幼い彼の命を掬った蟬人形エヴリは、その後も彼の運命を導いてゆく。成長したドロンテはやがて父親に放逐され、酒場や戦場、農地などを放浪するが、その旅路で黒いターバンと琥珀の首飾りを身につけた回教僧——あの蟬人形の現身——が何度も道行く先に姿を現わすことになるのである。

愛欲と暴力の彩る粗野な現実と、黒魔術やサバトなど闇の幻想が交錯するなか、神秘はまるで影のように彼の歩みにつきまとう。秘密に満ちた出会いの円環、その果てにドロンテを待つものは何か。

この小説は、螺旋を描いている。

ドロンテの歩みは様々な人物との再会を繰り返しながら進む。その螺旋は特に二人の人物を軸に廻る——回教僧エヴリと、幼馴染のアグライアだ。幼少期に死別したアグライアは、たとえば悪漢から掬い出したとある少女に、あるいは旅籠屋の部屋の肖像画に、姿を変えて幾たびも彼の前に姿を現わす。彼の情愛の遍歴は、ありし日のアイコンたる彼女の面影を探す旅にはかならない。またドロンテは亡きアグライアを追い求めながら、同時に回教僧エヴリの存在へと近づいてゆく。回教僧は自らをイサ（救世主イエスのトルコ語読み）と称し、ドロンテに云う、「すべてはあなたの浄化のためです」。

これはドロンテの、現世という煉獄の山を登り永遠の生へ到達するための巡礼の旅なのだ。そのための聖化された触媒たる乙女アグライアは、西欧文学ではベアトリーチェの、マルガレーテの、そしてアウレリーエの変奏である（評者はこのドロンテの遍歴を、ホフマン『悪魔の霊液』のメダルトゥスのそれと重ね合わせずにはいられない）。そんな煉獄を登る巡礼の最後の地はフランス革命下のパリ。斬首台の刃という究極の終着点を経て、ドロンテはエヴリとの同化を果たし、ゼノン・フォラウフとして転生する——螺旋は頂点で収束する。

『廃墟建築家』『男爵と魚』に続く「オーストリア幻想小説コレクション」第三冊は、訳者曰く「オカルティズム博覧会」だ。一八世紀ドイツの秘教世界と東方の魔術的観念に彩られた夢幻のパノラマが広がる、二〇世紀オーストリア幻想文学屈指の傑作。

（猫足）

（二四四頁 税込四八四〇円 7月刊）

〈特集〉海

海は陸を隔て、想像をひらき、そして人を運ぶ。ヴァイキングが思い描いた彼方、湾岸が映す滑らかで不平等な世界、そしてすべての生命の始まり。

三つの海へ、いま改めて航路を引く。

(ひるね)

海の向こうを思い描く——中世北欧ヴァイキング

海を見たときに感じる開放感には覚えがある。自由だと唐突に感じるあの瞬間、私たちはおそらく、海の向こうに「ここではないどこか」が存在することを予感している。

歴史を振り返ると、自らが生活を営む陸地を後にして、海を渡った人間が大勢いたことは明らかだ。例えば、中世北欧のヴァイキング。ノルウェー最初の統一者、ハラルド美髪王の治世、圧制を嫌った誇り高き豪農らはアイスランドを目指した。自由を求めた彼らの目に海はどのように映ったのだろうか。

◆想起され、語られた海

アイスランドに入植した人々はその後貴重文獻——エッダとサガ——を現代に残す。谷口幸男著『エッダとサガ 北歐古典への案内』は、これらを体系的に紹介する一冊である。

「エッダ」は、ノルウェーに伝わる神話や英雄伝説が入植によりアイスランドに持ち込まれたもので、「北欧の自然とゲルマン人の民族性」がよく反映されているという。

このエッダ神話において「海」は巨人ユ



ミルの血から作られ、そして海の新エーグルは巨人族の出身だと歌われる。本書が指摘するように、ギリシア神話では神々に敵わない巨人族が、エッダ神話では、遑れば神々の淵源であり、神々と対等なばかりでなく世界の終末では相討ちになり神を滅ぼす存在とされている。そうだとすると、海がときに神々ですら恐怖する巨人族と結びつけられている点は興味深い。オーディンは災難を招くミズガルズの大蛇を海へと投げ込み、神々に追われて鯉の姿で逃げるロキは、間近に迫った海を避けて追手の方へ引き返す。エッダに語られる海からは、人々が海へ向ける畏怖の眼差しが感じられる。

しかし人々は海を恐れてばかりではない。彼らは海で漁をし、航海を繰り返した。「サガ」で語られるのは、現実目の前に存在する超え(られ)るべき対象としての海である。十二、三世紀頃から記され始めたこの散文物語は、優れた文学作品であると同時に「歴史的な記録」としての評価も高い。アイスランド入植の始まりを語る『入植の書』、詩才を歌われ、また戦闘にも長けたエーグルの生涯を中心に語る『エーグルのサガ』など約二百篇は

ど残るこのサガ作品群からは、海を越えることで物語——彼らの人生が展開していくことがわかる。

彼らがあまりに頻繁に航海するものだから忘れてしまいうことになるが、海を越えるとは決して簡単なことではなかったはずだ。『エギルのサガ』には処刑前に助命を願う王に頌歌を捧げる場面がある。エギルは「西に向かい、海を越えて余は来れり」と始める。命を懸けた朗唱の第一声に海を越えて来たという表現が選ばれていることに注目したい。〈首の身代金〉と呼ばれるエギルの命を救ったこの詩からは、当時の人々が共有していた航海の困難とその価値が推察される。

◆生活の先に思い描かれる海

ここまでの〈語られた海〉を歴史の実像と結び一冊として熊野聰著『ヴァイキングの歴史——実力と友情の社会』が挙げられる。

本書は、考古学史料やその他文献と一致



する範囲でサガの史料の価値を認め、豊富な具体例としてその記述を用いる。そして野蛮な海賊ではなく「一般的な生活者」としてのヴァイキング像を提示する。

八世紀に彼らの船に竜骨が採用されたことで遠距離航海は始まる。熊野はその船に乗り

込んだ漕手の存在を指摘している。「自分の本来の生活本拠の外へ掠奪にでかける」というヴァイキング活動は、この漕手を含む「家人」を養う手段の一つであった。ヴァイキング活動の主体は自立した農民たちである。彼らは農場経営に補充する経済活動として海を越えた。

このようにヴァイキング活動を生計の一部と捉え、彼らの社会を再構成することで、そ

港湾・コンテナ・難民——滑らかで不平等な海

○海に翻弄される港と人びと

基隆港の朝は早い。午前三時、「路傍の街灯の下には二軒の屋台が隣り合い、それぞれきばきとスーパの用意をしている」。すっかり明るくなった午前九時、屋台の女性はスーパをかき混ぜながらいった。「基隆港はとくに『死港』になっちゃったんだね。『静かな基隆港』は、世界の物流を支える港に生きた人びと、そして変わりゆく町を丹念に描き出す極上のエスノグラフィだ。

台湾北部の町・基隆は、日本統治時代に、南方の貿易地と日本をむすぶ積み替え港として栄えた。労働機会を求めた男たち



の航海が無謀な冒険ではなかったことが見えとくる。自由を求めて飛び出したかのようにみえたアイスランド植民も「当時の北欧の社会的組織と技術をもって行われ、特別の飛躍を伴ったものではない」とされている。彼らが思い描いた海の向こうは、きっと夢物語ではなかったのだろう。「ここではないどこか」を思っ海を眺める眼差しは確かな行き先を捉えていたのかもしれない。(ひるね)

は全国から港湾に集まり、貨物の荷役作業に従事した。時間を問わず港に出入りする船に合わせた不規則な労働形態から、男たちは基隆の地元社会や家庭から離れ独自の社会を形成していた。彼らは同郷ネットワークや労働組合によって強く結束し、家に帰るよりも茶屋やカラオケ店で船待ちの時間をつぶしたり、人員の調整をしたりしていた。経済を動かすグローバルな物流の最前線を担う彼らは、経済発展を支える誇りを胸に働いていた。

一九七〇年代、港湾にコンテナが導入されると、基隆港の労働環境は一変する。手作業による荷役は、巨大なキリンのようなガントリックレーンと、トレーラー車に代替されてしまった。最終的に、一九九九年の埠頭の民

営化によって、労働者たちの多くは港湾労働から完全に追い出された。それは職と収入の喪失だけでなく、生活のリズムや仲間との付き合いが断ち切られることを意味していた。繁華街に通う日常は消え、男たちは、家族との時間を過ごすようになる。ほとんど関係を構築してこなかった子どもと妻の前に、収入を喪失した状態で現れた男たちは、おのれの無力さに打ちひしがれたのだった。

○海を移動する滑らかな箱

基隆港の「死」は、ひとつの町の終わりであると同時に、世界の始まりでもあった。経済史家レビンソンの『コンテナ物語』は、コンテナ化がどのようにして世界経済の仕組みそのものを塗り替えたかを描く。コンテナは貨物を標準化し、積み下ろしにかかる時間と費用を劇的に減らした。港で数日を要した作業は数時間で終わり、輸送コストは製品価格のわずかな比率にすぎなくなった。企業はもはや「どこで作りどこで売るか」を地理に縛られず決められるようになったのだ。

コンテナがもたらしたのは、モノの匿名化だった。鉄の箱に封じられた貨物は、送り主も作り手も内容物も見えないまま、世界を移動する。労働者が中身に触れることもなく、コンピュータ上では識別番号として管理され

る。誰が作り、どこで積みまれ、どんな海を渡ったのかは、見ても分からない。海はいまや、静かに循環する資本の回路となったのだ。

○監視と分断の海

しかし、その静かな海の回路には、別の現実が潜んでいる。二〇一七年、リビアの町フムスで、欧州行き貨物コンテナの中から十三人の移民の遺体が見つかった。コンテナの不可視性は、検問を逃れる手段となっている。

『亀裂 欧州国境と難民』が提示するのは海のもう一つの姿だ。写真家スボットノと記者アプリルの二人は地中海から東欧の国境地帯まで、難民と移民が押し寄せる境界に赴き、「要塞化」するヨーロッパの姿を



記録する。全コマが写真で構成されたグラフィックノベルは過酷な現実を映し出す。

ヨーロッパを囲む海は監視と隔離の境界になっている。イタリヤとチュニジアの間の海峡では、多発する密航船の海難事故を受け、救助作戦が実行されていた。悪質な仲介者たちは難民たちを劣悪な船に詰め込んでいるのだ。何とか浮かぶ船の上での險しい表情。彼らは海に怯えていたのだろうか。

現代において、海は世界を繋ぐ場になっている。そのつながりはかつてないほど滑らかで、そして平等である。誰が渡れるのか、何が渡れるのか。そこに映し出されるのは、資本の流れを優先し、人の生を選別する世界に他ならない。

(たいやき)

海は生きている——生命と心の起源と未来

ここまで、海と人との関わりが語られてきた。食糧や資源の在り処、あるいは移動経路として、われわれの生活は海とともにある。

しかし、海とは何よりもまず、生き物たちの住まうところであるはずだ。本特集の締めくくりに、そのような「生きとし生けるものた

ちの海」としての側面に触れよう。

◆われわれはどこから来たのか

《生命と心は水中で始まり、私たちの身体を構成するすべての細胞には海が宿っている》——そう語るのは、熟練のダイバーという顔も持つ哲学者ピーター・ゴドフリース

ミスである。海が生命の起源であることはよく知られる。われわれ人間もまた、進化の系譜を巡れば海のなかに辿り着き、実際、いまも海中にはカイメンのようなきわめて原始的な私たちの生命が息づいている。では、かれら海綿動物は「心」を持っているだろうか。持っているとするれば、どのようなかたちで？ 持っていないとするれば、進化の系統樹のいったいどこで、生物は心を獲得したのだろうか？ いずれにせよそれは、命と同様に、海からやって来たはずだ。ゴドフリー・スミスは『メタゾアの心身問題』において、海の生き物と戯れながら、心の起源、生き物にとっての意識の在りようを考察する。ここで云う Metazoa とは、多細胞生物のことをさす。つまり、動物一般だ。



カイメン、サンゴ、イソギンチャクにヤドリ、エビやタコやイカ、そして魚……。海に棲むそれら多様な動物たちについて、ゴドフリー・スミスはエビには心があったサンゴにはない、というような切り分けをしない。また一方で、汎心論の立場も採らない。唯物論と生態学に拠って立つ彼の考えによれば、心の発生はグラデーションを持っている。それは刺激に対する反応から始まり、進化を通

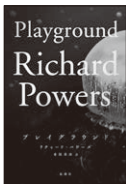
じて感覚に対する経験が複雑に編み上げられるなかで生まれてくるものだ。

逆に云えば、人間のような心を持たずとも、海の生き物はそれぞれに違った方法でその生を経験しているのかもしれない。タコは腕一本一本が、ある程度自律性を持っているという。であるならば、タコには世界がどのような感覚されているのだろう……。こうしたことを想像するとき、われわれの感じている世界もまた、ぐっと広がるように思う。

◆われわれはどこへ行くのか

自然科学と哲学が融け合うこの境地で小説を書き続けてきたのが、リチャード・パワーズである。彼の最新作『フレイグラウンド』が主題としているのは、ずばり「海」だ（謝辞にはゴドフリー・スミスの名前もある）。

南国の島に、海洋都市を建設する計画が持ち上がる。島の未来をめぐって住民投票がおこなわれるなか、小説はたびたびイーロン・マスクとマーク・ザッカーバークを掛け合わせたような「T長者の回想が挟まれる。ふたつの物語がどう絡み合っているのか、それは読んでのお楽しみだけれども、ひとつ云えるとするれば、前者が海とそこに住まう生き物たちの驚異を語る一方で、後者はそこに、



AIをもうひとつのテーマとして投げかけている点が大ききところだろう。AIは心を持つのか？ AIはこの地球に何をもたらすのか？ われわれはどこへ行くのか？

小説のトーンは、全篇通して暗い。もちろん、海に対する高揚はパワーズらしい知的興奮に満ちた文体で綴られる。しかし、その豊かな海はいま、失われようとしている。登場人物のひとりである年輩いた海洋学者は回想する――「地球規模で海水が酸化し、世界のサンゴ礁の大半が白化し、海底鉱物資源開発の始まりとともに生きた深海の心臓が割かれるのを目撃した」。この死にゆく惑星で、何を語ることができるだろう？ 海洋学者がぶつかる壁に、パワーズもまたぶつかる。すでに失われた、そしてこれから失われるすべての命への哀悼――それがこの小説だ。

しかし、小説は決して絶望で終わらない。《海はずっと展開し、ずっと探索し、ずっとさまざまな形を試していた。そして海はいたるところで、周囲にあるものについて忙しく語っていた。『…』それはつまり、生きとし生けるものすべてといえること。海も、人間も、そしてAIも、すべての存在は遊ぶことをやめない。海に戯れ、これまでにないことが試される。そこに未来がある。われわれはそうして、新しい海へ漕ぎ出す。（水炊き）

新刊コーナー

よくわからないまま輝き
続ける世界と
気がつくための日記集

古賀及子著 大和書房



日記をつけ続けている。生活の記録というよりも気持ちの整理のために始めたもので、どれだけ効果があるのかはわからないけれど、特段辞める理由もないままに三年日誌は二冊目に差し掛かってしまった。

私の日記事情はどうでもいいとして、本書はいわゆる日記エッセイと呼ばれるものだ。

著者は都内で息子・娘と三人暮らしのライター。彼女の日々の暮らしの断片が綴られているのだが、例えばご飯の炊き方をめぐる一節。

「炊飯器を使わずコンロで炊くのはそれなりに聞く話だ。けれど、どこか私には、炊飯器ではないツールで炊飯するのは上手に生きている人間がやることであって、私がやっていることではないという卑屈な偏見がある。」

うわあ！ 卑屈だ！（結局著者はフライパンで美味しくお米を炊きあげていたのだが）でも、それが許されるのが日記という（基本

的には他者に開示されない）文章の魅力だろう。そこから広がる著者の感受性がなんとものびやか。生活のなかの些細な変化、そこに立ち現れる過去の思い出と家族の未来。自分宛に書いた文章が持ちうる尊さというものがあって、その無責任さが心地いい時もある。この本を読み終えて、日々を記すという行為はともすれば流れ去っていく出来事の面白さと美しさに「気が付くため」で、日記はその輝きを捉えるレンズなのだろうと思った。さすれば、汚い字で書き殴った私の日記もそれなりに輝いて見える。（浅煎り）

（二八八頁 税込一八七〇円 6月刊）

変わり者たちの秘密基地

国立民族学博物館

ミンパクチャン著
榎永真佐夫監 CEMEDIAハウス



大阪・吹田市にある国立民族学博物館（通称・みんぱく）に行ったことはありますか？ ここはただの博物館じゃないんです、「民俗学と文化人類学の国際研究拠点」なんです。

ここで展示されている、あるいは収蔵庫に

収集されている資料は、全て研究することを目的に集められています。展示物は初代館長のこだわりにより、ほとんどが露出展示。実際に世界各地でそこに住む人々が使用していたものが展示してあるので、においや質感を含めて様々な感覚を駆使して楽しむことができます。たしかに遊牧民のテントとか、少し動物のにおいがします（同行した友人には感じられなかったみたいですが）。

さて話は戻りますが、みんぱくは研究所なので、多くの研究者が在籍しています。本書では、みんぱくの設立理念や展示内容の独特さの紹介はもちろんのこと、みんぱくに在籍している七名の研究者への取材に基づいた話が描かれています。それぞれの研究者の研究者人生……なんて研究者になったのか、研究者になっからどんな苦労があったのか、どうという理由で研究テーマにたどり着いたのか。フィールドワークが偶然に支配されている」という言葉通り、ありえないほど十人十色の内容が詰まっています。

意外と知られていないですが、京都大学の学生はキャンパスメンバーズなので、入館無料なのです。行ったことがある人もない人も短くて二時間、長くて二日の時間を要する展示を堪能してください！（フランチ）

（三三三頁 税込二二〇〇円 9月刊）

私たちに名刺がないだけで

仕事してこなかったわけじゃない
韓国、女性たちの労働生活史
京郷新聞エンターテインメント部 著
すみずみ信 訳 本和 監



朝鮮戦争から経済成長、そして現代まで、激動の韓国社会を、働いて、働いて支えてきた女性たちがいた。彼女たちは、幼いころから家事や工場労働に従事した。結婚すると夫の家族に組み込まれ、専業主婦にならざるを得なかった。子育てや日々の家事労働、さらには義理の両親の介護まで、期待される役割をこなしながらも、彼女たちは合間の時間で様々な仕事をし、家計を支える。本書は、老年を迎えた女性たちの「ありふれた」苦労話を記録するインタビュー集だ。「ほら見て、これが女性の人生だぞ」。

頁を開くと、カラフルな紙面と力強い女性たちの写真が目が魅かれる。新聞の連載記事がもとになっており、記述はとにかく厚い。麵料理屋、果樹園の倉庫、リビングルーム。対話形式の文と写真が交互に並ぶレイアウトによって、彼女たちが生きてきたその場所、記者に自らの人生を語り、記憶をひらいていくのが聞こえてくる。朝から晩まで働きのなが

らも、社会的には「仕事」とは認められず、軽んじられてきた。「名刺」を持たない彼女たちが担ってきた仕事の多さには圧倒される。だからこそ、「果樹園代表、婦人会長、財託マスター、家事労働者」のように、一人ひとり仕事を名刺にする演出は粋だ。

合間のコラムでは、時代背景や、韓国の労働市場の変化について解説され、女性の置かれた状況や、労働力の重要性がよくわかる。読んでみると、日本の女性たち、母や祖母の顔が浮かぶ。私がこれまで支えられてきた彼女らの苦労に思いを馳せた。(たいやき)

(二七二頁 税込二四二〇円 7月刊)

絶滅の発見

マーティン・ジャンナル 著
真鍋真訳
創元社



生命の起源とか、ヒトの誕生とかは気になって調べることが多いが、絶滅というものに注目したことはない(個人的には)。どうせ遙か遠い昔の話ではと思ってたが、なんと現在、大量絶滅期に入ったという考えも出てきており、どうやら他人事ではなさそうだ。

本書は一六〇〇年代のモリーシヤス、ドードーの話から始まる。詳細な記述はないものの、逃げるのが下手な鳥であるドードーが、航海の中継地点として上陸した人間たちに狩られ滅んだということだ。ちなみにこの頃はダータの分析や発見の報告など学術的な手続きが生まれてきた時期なのだが、そういった時代背景にも触れてくれるのが嬉しい。なんだか科学の営みの歴史に触れている気分にもなる。

こういったミクロな話だけでも面白いのだが、本書は大量絶滅についても解説する。過去五回あったとされる大量絶滅について、当時の生物多様性がどうであったか、どんな種の生物が絶滅したか、何が原因か、などが詳述されるので、それぞれの違いを学びながら読める。完全でないにしろ数億年前の出来事がここまで詳らかにされていることに感動するだろう。

全体として教科書のように流れを追った説明になっており、読み物として楽しめる構成になっているのでどんどんページをめくっていきける。余談になるが、絶滅という恐竜を連想する人は多いだろう。本書では「絶滅するべくして絶滅した存在の代表的な例」と腐されていくなんか少し悲しい。(竹輪)

(二四〇頁 税込三〇八〇円 10月刊)

発心集

ビギナーズクラシックス日本の古典

鴨長明著 伊東玉美編

角川ソフィア文庫



『方丈記』で有名な鴨長明が記した仏教説話集、それを初心者向けに編集したものです。編者によると、『発心集』は『方丈記』を書いた鴨長明が、その後亡くなるまでの四年の間に著したもので、当時の説話集の常識に反し、典拠の提示もインド・中国の説話の採録もしませんでした。

著者と読者にとって身近な時代・場所を舞台にしたものを、しかも長明が聞いてじっさいに心を動かされた話だけを収めるという方針は歓迎され、当時から多くの読者を得ていたようです。

評者が読んで心を惹かれたのは、次から次へと、何の役にも立っていない人、何の生産もしていない人が出てくることです。しかもただ出てくるだけではなく、素晴らしい仰ぎみるべき人物として称賛されている……

勿論それは今の価値観から見てのことであり、家も職も捨ててホームレスになることも死ぬまで部屋に籠って念仏を唱えつつけることも、

とも、尊い修行なわけですが、もし彼らが今の京都にいたら（彼らのこの世への執着の無さを称える長明も一緒に）何らかの治療をすすめられているだろうと思わざるを得ません。この本には、下鴨神社の神職の家に生まれ、大原、そして日野に暮らした著者らしく、京都の地名がたくさん出てきます。忙しく過ぎる日々なか、八〇〇年前にはこの土地にこんなに導く感性・人生観をもった人々がいたのだと想像してみること、悪くないかもしれません。

（投稿・貸出更新）

（一九九頁 税込二二〇円 8月刊）

無駄にしたくなかった話

水村美苗著

筑摩書房



本書は水村美苗が二〇〇九年から様々な場所に執筆したエッセイと講演などを集めたものだ。夏目漱石と谷崎潤一郎を中心とした日本近代文学についての（学術的にも言える）分析から身辺雑記的なもの（いたる多彩な内容は、本書が基本的には時系列に

従って並べられることでその多彩さを際立たせる。やもすれば乱雑になりかねないこの構成に一貫性を与えるのが、「侵食するものとしての時」というテーマだ。本書がカバーする十五年余りは、作家が母と姉を取った時間でもある。

日記と分析と追悼とが隣り合うとき、私たちは抽象的な分析にも、時の刻印がはっきりと押されていることを悟るだろう。ときに客観的な文体で書かれていても、すべては人生の一部であり、常に終わりに向かう中でなされた仕事なのだ。

このような視点に立って本書を読み終えた時、読者は最後に収録された日記が、冒頭の「無駄にしたくなかった話」で描かれる旅行を予告していることに気づくだろう。つまり、時系列という観点で見ると、本書の本当の終わりは、「無駄にしたくなかった話」の終わりなのだ。再読によって初めて姿を現すこの円環は、流れ去る時間を受け入れつつも、あくまで抗うことをやめない。

（追記）本書の中には過去の京大男子による著者への失礼な言動が描かれています。（僕を含む）京大男子の皆さん、女性には礼儀正しく振舞うように！

（コーク）

（二八四頁 税込二五三〇円 9月刊）

昏い時代の読書

宮嶋資夫から野坂昭如へ

道旗泰三著

講談社選書メチエ



「人間がだめになつたんですよ。張り合いが無くなったんですよ。大理想も大思潮も、タカが知れてる。そんな時代になったんですよ」——太宰治がこう嘆いて数十年前代はますます行き詰まりを迎えた「昏い時代」だ。「くたばれポストモダン」と声を荒げる著者は、大正から平成にかけて筆を執つた五人の作家の作品のうちに、現代という出口のない泥沼の先触れを見出す。冒頭に引いた太宰のほか、宮嶋資夫、坂口安吾、桐山翼、野坂昭如の作品が丹念に繕かれる。いずれにも目を覆いたくなるような絶望と死の硝煙が立ち込めているが、著者の力強い筆致と芯のある分析が読者を物語の奥底まで導く。今では忘れ去られた作家の生涯も子細に辿られており、死者の魂を呼び起こそうとするかのようである。

では、彼らの文学は、そしてそれを読むことはこの「昏い時代」に何をもちたすのか？ 著者の答えはこうだ。「何ももたらさない」。

五人の文学を貫くのは挫折だ。彼らの怒りも絶望も叛逆も、現実を前にむなしく破れ去る。それを安易に図式化し、分かりやすい効用に結びつけるのはお門違いだろう。むしろ、挫折を挫折のまま描き起こすこと、それによって危機的な現実を浮かび上がらせること——これが文学の持つ力なのではないだろうか。彼らの挫折は、現代社会を覆い隠す上っ面だけの理想や思想を吹き飛ばし、赤裸々な現実を突きつける。それを目をそらさずに見つめること、それこそがこの「昏い時代」に必要な読書なのだ。

(二七二頁 税込二四二〇円 8月刊)

二十一世紀の荒地へ

酒井直樹／坪井秀人著

以文社



奇妙な本だ。酒井直樹と坪井秀人、現代日本の碩学二人による「文学」や「言語」、「政治」や「歴史」をめぐる対談集、と言えは聞こえは普通だが、奇妙なのは、一回目の対談と二回目の対談のあいだに約二〇年の歳月が流れていることである。

最初の対談は二〇〇一年。九・一一の混乱の最中だった。次の対談は二〇二二年。コロナの混乱の最中だった。読者として考えざるを得ないのは、この二〇年の開きが本書に何をもちたらしめたのか、である。そして私なりに言えば、そこにもたらされたのは、「荒地としての二一世紀」という視座である。

最初の対談は、T・S・エリオットの『荒地』と、戦後詩の運動「荒地」をめぐるものだった。しかし二回目以降の対談では日本語、国民語、天皇制、国民国家といった主題が前面に浮上する。一見、これは初回の対談からの逸脱に見えるが、これら新たな主題は排外主義や植民地主義がいまだ跋扈する「荒地としての二一世紀」への応答である以上、『荒地』を鍵語とする本書の圏内にあるのだろう。

九・一一の犠牲者には外国人が多く含まれるのに、彼ら／彼女らを合衆国国旗と愛国歌で一律に吊つことの暴力性。あるいは関東大震災の発生時、「一五円五〇銭」が言えず虐殺された朝鮮人の死を悼んで、「押し付けられた日本語」の代わりに「純粋な朝鮮語」の回復を目指した壺井繁治の裏返し純血主義。二人の切り込みはじつに鋭い。そしてその鋭さは「二一世紀の荒地」を生きた二〇年の歳月によっても磨かれたのだろう。(はや)

(四五二頁 税込四四〇〇円 6月刊)

完訳 フィッツジェラルド伝

アンドルー・ターンブル著

永井定夫・坪井清彦訳

中央公論新社

早すぎた成功、失意の長い年月、希望に手を延ばし続けないがらの最期——フィ



ッツジェラルドの人生は一編の物語だった。だから、彼を描く伝記はいつも「物語」として我々に迫ってくる。もちろん、記録としての役割も止めることはないのだけれど。著者ターンブルは、本書を「この物語」と呼んで語り始め、そして、作家の幼年・青年期、それに続く栄光の時代が描き出されてゆく。

けれど、この伝記は物語の傍観者ではない。一九三三年、まだ若いターンブルの人生に、フィッツジェラルドがすこし覚束ない、けれどまだ自信に満ちた足取りで登場するからだ。ターンブル家に下宿した彼は、そこで『夜はやさし』へと結実する呻吟の日々を過ごす。でも彼はまだまだ魔法を失ってはいない。「フィッツジェラルドにじっと見つめられるというか、その目に釘付けにされてしまう」と、たまたまそのとき口にしていたことほど重要なものはこの世にないのだと、つい信

じ込んでしまう、そんなところがあった。我々の脳裏に、ギャツビーの微笑が、ディック・ダイウアーの眼差しが、フィッツジェラルドと二重写しに蘇ってくる。

「平和荘」を離れたのちの一〇〇ページで描かれる作家の人生は再び三人称で進んでゆく。しかし結末——作家の葬儀のシーン——に一時、「私たち」が姿を表す。そう、そこには著者ターンブルが立っているのだ。フィッツジェラルドの人生とターンブルの人生がもういちど交わり、ターンブルはニックのように、故人の肖像を描き始める。（コーク）

（五四四頁 税込三三〇〇円 8月刊）

悲劇とは何か

テリー・イーグルトン著

大橋洋一訳

平凡社



悲劇。この語が意味するところは二種類ある。すなわち、演劇ジャンルとしての

の「悲劇」、そして日常的な用法における「悲劇」。本書が問う悲劇はこの二つの意味を横断する。悲劇とは何か？

この問いを論ずるにあたって、まずは定義

が問題となる。しかし、「悲劇ほど執拗に理論化されてきたものはないが、（中略）悲劇ほど、理論と実践とのなほだしき乖離を露呈させる芸術形式もない」。今日に至るまで様々な悲劇の定義が提示されてきたが、実際に要件を満たす作品は少数だ。アリストテレスの『詩学』以降、この傾向はずっと変わらない。重要なのは定義そのものではなく、批評家たちが何を見出したか？、ということだ。

著者イーグルトンはドイツ哲学の悲劇論を中心とした膨大な批評、そして実際の作品を自由に引用しながら議論を展開し、五つの章が扱う主題は多岐にわたる。悲劇の死、自己と他者、過去と未来、虚偽と真実、闘争と和解。あらゆる観念が入り混じる。そして悲劇という芸術に関する議論はいつの間にか、我々の生、実存に関する議論に行き着く。悲劇はまさに「偉大な芸術と、もっとも根源的な道徳・政治的問題とが、緊密に交錯する場」としてある。

およそ人間の存在するところ、その規模の大小にかかわらず「悲劇」が絶えることは決してない。我々が悲劇とそれをめぐる議論を学ぶことは同時に、このどこまでも悲劇的な世界で生きていく為の態度を学ぶことでもある。その価値は、必ずある。

（二二〇頁 税込四九五〇円 8月刊）（荒砥）

締切と闘え！

島本和彦著

ちくまプリマー新書

明日はあれの締切で、それが終わったら明後日はあれが締め切りで……。そんな日々だが、本書を手にとったら変わるかもしれない。しかし冒頭から「まず机にしがみついてやるべきことをやれ！」と二喝されてしまった。救いはないのか。

本書は締め切りと闘い続けてきた漫画家が、いかにピンチを乗り越えてきたか、どういうメンタルで仕事をしていったのかを書いたものである。こうすれば効率が上がるみたいなノウハウ本ではない。具体的に書かれていることといえは自分の能力を把握するという至極当然のことぐらいだ（それが難しいから苦労しているわけだが）。

締切の本というよりは、仕事の本であるように感じる。漫画家という仕事の大変さが生々しく伝わってくる。編集者に面白くないと言われた話が何度出てきたことか。そういうエピソードの方が締切なんかよりよっぽど読んでいて辛い。ただ締め切りに追われているだけというのが取るに足らない問題に思えてきた。

(二〇八頁 税込九九〇円 10月刊)

(竹輪)

カウンセリングとは何か

変化すること

東畑開人著 講談社現代新書

心という領域を扱う仕事、カウンセラー。京大にも常駐する身近な存在ではあるものの、その内実は外からは見えにくいものだ。著者・東畑の問題意識は、現代の臨床心理学が専門的な学派に分化・発展してきた反面、全体像を捉えにくくなってきたことにある。

ゆえに本書で問われるのは、原論——「カウンセリングとは何か」。曰く、カウンセリングとは心の不幸を解析すること（謎解き）、現実を動かすこと（作戦会議）、心を揺らすこと（冒険）など、多様な要素を持つ。いずれも面白いのだが、個人的に感得したのはその一連の過程の中核が「破局を生き延びる」という力にあること。人生に不意に訪れる心の死と再生の谷。クライアントの生活環境と人生の物語の双方に介入し、変化を手助けすることこそがカウンセリングの本質なのだ。

「話すことは離すことである。過去を物語るのは起きた出来事を現在から引きはがし、過去に置いておくためです」——なるほど、だからこそ人は生き延びるために他者と向き合って話すことを諦めない。

(四四八頁 税込二五四〇円 9月刊)

(浅煎り)

考古学の黎明

最新研究で解き明かす人類史

小菰子川歩・関雄二編 光文社新書

生前カリスマ的人気を博した米国の人類学者、デヴィッド・グレーバー。彼が死に際に遺した大著『万物の黎明』は、数万年にわたる人類の進歩史観を根本的に批判したことで人々に衝撃を与えた。しかしこの本、あまりにデカすぎて（二段組で七〇〇ページ！）読み通すのはかなり根気が要る。

そこでオススメしたいのが、この本。『万物の黎明』にショックを受けた二人の考古学者・人類学者・哲学者が、それぞれの分野から応答を試みている。立場も書き手によっても様々で、グレーバーの主張をさらに詳しく理論化しようとする人もいれば、その記述が本心に史実に妥当かと疑義を呈する人もいる。通読して、たった一冊の本からここまで多くの論点が出てくるものかと驚く。

特に評者が感動したのが（誤解を恐れず言えは、新書にあるまじき情報量。かなり専門的な内容にも果敢に踏み入り、ハードルを下げすぎない姿勢に励まされた。『万物の黎明』の副読本としても、日本の人文一般の成果論集としても読めるお得な一冊。

(四四八頁 税込一四三〇円 9月刊)

(倉井)

録音メディアと音楽

音楽を言葉にするのは難しい。それは、音楽を聴いたときに人のもつ印象がそれぞれに違ふというだけでなく、聴くことと読むこととの間の根本的なメディアの違いにも因るだろう。とはいえ、音楽も書物も、繰り返し聴かれ、読まれることで評価が定まり、共通見解（らしきもの）が形成されていく。音楽という書物にあたるもの、それは——近代以降という観点からすれば——蓄音機、レコード、CDといった録音メディアだといえる。いまや、録音なしでは音楽について考えることすら難しくなった。やや遠回りではあるものの、こうした音楽と録音の関係とは何か（それは言葉と書物の関係と同じものか）、原雅明『アンビエント／ジャズ』(Pヴァイン)を元に考えてみたい。

同書は、タイトルにある二つのジャンルの歴史を追うことで、録音が音楽にもたらした変化を描いている。例えば、レコード産業が確立した六〇年代以降になっても、ジャズではオーヴァーダビング（多重録音）によって音楽を作ることに一定の忌避感があった。それは、ジャズの本質がライブでのアドリブや即興演奏、奏者同士の相互作用にあり、ライブで再現できない曲を作ることばジャズの本質を見失うものとされたためだ（この「生音信仰」はなお根強い）。トランペット奏者のマイルス・デイヴィスは、こうしたジャズの潮流とは正反対に、多重録音がジャズにもたらす新たな可能性を死の間際まで探究しつづけた。自身のバンドメンバーを率いて、昼夜問わずスタジオにこもり、ほぼ毎年のようにアルバムを発表する中で、既存のジャズからは決定的な離反が起こる。過剰な多重録音は、レコードで聴く際に楽器の音同士がぶつからないよう、音の配置を

調整する必要を生み出す。録音はリスナー側の視点を生み出した。

音楽家のブライアン・イーノもまた、アンビエント（環境音楽）を通して、マイルスの立場をさらに推し進めた。アンビエントとは、集中的な鑑賞と聴き流しのどちらにも耐えうるジャンルのひとつであり、イーノは度重なる実験を通してこのアンビエントの可能性を模索した。例えば、演奏のループ。長さや周期の比率が異なるボーカルや楽器の演奏を多重録音し、何十回、何百回とループさせることで、イーノは「音楽的な構造の維持・規則性」と、「そこからのズレや揺らぎから生じる有機的なサウンド」の両極を一つの音楽に落とし込んだ。これが、「強い印象は残さないが繰り返し聴くことに向かわせる」という、独特な聴取体験をリスナーに与えるアンビエントを生み出したのだ。

ここであって、録音はもはや、ライブで再現するための曲を極力生の音でレコード／CDに刻み込むという二次的な役割から解放され、それとはまったく別な領域を獲得したといえるだろう。それは、生演奏の似姿としての録音ではなく、それ自体で完結した、聴き方をリスナーに委ねる録音である。勘のいい読者ならすでに、これが文学理論という「読者共同体」の議論とおおむね重なっていることにお気づきかもしれない。書物にやや遅れた録音メディアの発展は、およそこうした考え方の「転回」を経て、今に至っている。

もう紙幅が足りないが、「転回」後の議論について気になる方は、庄野進『聴取の詩学』（春秋社）や、デヴィッド・グラブス『レコードは風景をだいにする』（フィルムアート社）を読みたい。もちろん、アンビエントを聴きながら読むのもオススメ。（倉井）

消えた出版社を追う——文学史へのアンチテーゼ

出版社、それはじつに儚い存在だ。吹けば飛んでしまう、とまではいかないが、気づいたときにはもう、あの出版社も、その出版社も消えている。とくに個人経営の小さな出版社（今なら「ひとり出版社」と呼ばれる存在）は、現われては消えての繰り返し。まさに泡沫夢幻である。しかしこれは第三者から言える放言だが、この儚さゆえの魅力というものが、そこには確実に存在する。そうした魅力を有する幻の「消えた出版社」、その足跡を追った一冊をここでは紹介したい。内堀弘『ボン書店の幻』（ちくま文庫）である。

*

一九二〇年代中頃から一九三〇年代初頭にかけて、このモダンイズムの時代に突如現われ、その数年後、彗星のように再び突如消えてしまったのが「ボン書店」である。



刊行者の名前は鳥羽茂。彼は「たった一人で活字を組み、自分で印刷もして、好きな詩集を作っていたらしい」。痛ましいほど小さな出版社だったが、ボン書店から本を出したのは、北園克衛、春山行夫、安西冬衛、山中散生など、戦前のモダンイズムやシュルレアリスムを牽引することになる錚々たる詩人たち。鳥羽はまだ無名だった彼らに目を付け、瀟洒な詩集や訳書（その多くは今では法外な古書値が付いている）を着実に刊行していったのである。利益はもうろん出ない。むしろ赤字である。だがある詩人は言う——「ソロバンのはじけないような詩集をボン書店が出してくれたことが、どんなに詩文学のために役立ったか知れない」。

しかしこの鋭い目を持った鳥羽茂とは何者だったのか、その段に

なると、そこにはほとんど何の痕跡も残されていないことに本書の著者は気づく。「なぜ書物というものは著者だけの遺産としてしか残されないのだろう。幻の出版社といえは聞こえはいいが、実は本を作った人間のことなどこの国の『文学史』は端から覚えていないのではないか。『まことに『文学史』というもの（…）には身を削るようにして書物を送り出した『刊行者』の存在など入り込む余地はない。これはじつに痛烈な（主流）文学史へのアンチテーゼではないか。古本屋を営む著者はこの状況に抗い、わずかに残された痕跡を頼りに、鳥羽茂の姿をそこに甦らせようと試みる。その無謀な試みの記録が本書なのである。

最後に触れておきたいのは、本書の文庫化を機に付された「文庫版のための少し長いあとがき」について。本書が単行本で出てから約一〇年後、著者のもとに一本の電話がかかってきた。「私の母は鳥羽茂の妹です」——それは鳥羽の親族からの電話だった。鳥羽の妹と息子がまだ生きていることを告げられた著者は、二人に会ったのち、その証言を手がかりに、鳥羽が死を迎えた場所、大分の田舎へと向かう。そこで著者が見たものとは何だったのか——それがこのあとがきには書かれている。その終わり方はあまりにも美しかった。「出来過ぎ」だとも思うが、著者はそれを本當に見たのだ。

*

長谷川郁夫『われ発見せり』（書肆山田）や、早田リツ子『第一藝文社をさがして』（夏葉社）など、「出版社」や「刊行者」の足跡を追った本は、数は少ないものの存在する。こうした仕事もまた、文学史の大切な仕事のひとつであると私は確信している。（はや）

編集後記

最近（というか、二年くらい）考えていることがあります。それは、紙の本だけがもつ、「買う」ことの暗黙の権威についてです。

例えばアルゼンチンの代表的な作家・ボルヘスはいわゆる書痴（異常な本好き）で、すでに持っている本を書店で見る度もう一冊買いたくなる衝動に駆られていた（結局買ってしまう）という有名なエピソードがあります。ボルヘスの書痴具合を示すほほえましい挿話としてよく語られますが、ここで注目したいのは、本を「買う」という行為です。

突飛のように聞こえますが、実は本を買わなくても蔵書を増やす方法があります。どうするか。簡単です。著作権が切れたものを紙に印刷して製本すればよいのです。そんな本で埋まった本棚を想像してみてください。なるほど古典はずらりと並んでいるが、なにか物足りなさを感じるのではないのでしょうか。実はこの物足りなさこそ、そこから「買う」行為が抜けているからだ、と言ったら多分言い過ぎかもしれません。しかし、ネットも電子書籍も普及した現在、書物がもうすぐ絶滅しなかったのには、紙の本を「買う」ことに対する社会の共通認識が関係しているからではないかと思ってしまいます。まあ、一から印刷するより手取り早いですし……（倉井）

当てよう！ 図書カード

あっという間に師走。2025 年も終わりますが、師でもないのに忙しく走り回っている私は一体なんなのでしょう。さて走ると言えば毎年冬の京都で行われる全国高校駅伝ですね。歴代最多の優勝を誇る高校（男子の部）は、次のうちどれでしょう？

1. 世羅
2. 仙台育英
3. 西脇工
4. 佐久長聖

（浅煎り）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から 5 名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは 1 月 15 日です。



《8・9月号の解答》 8月号の問題の正解は、3. のシャープ兄弟でした。この試合があった2月19日は「プロレスの日」という記念日になり、ファンにとっては今やプロレス史上の重要な一幕となっています。図書カードの当選者は、まだこないさん、パウエルさん、フミリンさん、いがさん、カルーナさんの5名です。当選おめでとうございます。

（倉井）

読者がらひひひ

〇生きて行くのがツライ……と思った時に、読むべき本を紹介してください!!

（天つらそば太盛り）

—— 参考になるかわかりませんが、サミュエル・ベケットの『伴侶』をオススメします。生と死の瀬戸際のような状態が延々と書いてある、ちょっと異様な本です。文全体の意味を理解するのはまったく不可能なのですが、ワードのチョイスが妙で、折に触れ読み返しています。『伴侶』を含め、ベケットの晩年の作品はどれも疲れたときにオススメです。

〇あまりに暑いのでお盆は怪談で涼もうと何冊もまとめ読みしたのですが、ホラーではなく正統派の怪談を選んだので、不可思議で暑さから気は紛れましたが涼しくありませんでした。まとめ読みすると自動的に頭の中で類型や派生の整理が始まってしまうので、他ジャンルの本と交互に読む方が楽しめそうです。「幽霊小説アンソロジーへの招待」が面白かったので次は幽霊小説に挑戦しようと思います。

（防災研・カルーナ）

—— 吉田知子の『お供え』がオススメです。三〇年前の小説なのですが、いまでも新鮮に怖く、いや〜な後味が残ります。

（倉井）